



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3098 号 2016.6.26 発行

【主張】給付型奨学金 学問支える意義を論じよ

産経新聞 2016年6月26日

大学生向けの国の奨学金制度で返済不要の「給付型」創設が検討されている。参院選で与野党の多くが教育関連の公約の目玉に掲げた。

選挙向けのばらまき競争に陥らず、人材育成を支える国の教育予算のあり方についての議論を忘れてはならない。

独立行政法人「日本学生支援機構」を通じて行う国の奨学金制度は、卒業後に返済する貸与型だ。これに加え、給付型を民進や共産が求めてきた経緯がある。公明も創設を求め、自民も生煮えのまま、制度創設を検討すると公約に盛り込んでいる。

給付型が求められる背景は、就職できない学生や就職しても給与が安く返済できない者が多いからだという。だが現行制度でも、そうした卒業後の事情に応じて返済を猶予する仕組みがある。

貸与型は、返還金が後輩の奨学金の原資となり、より多くの学生が借りられる制度として定着している。給付型を導入するにしても財源はどうするのか。実現しても給付対象は限られるだろう。

それでも給付型を導入する意義は何か、あいまいだ。低所得世帯への助成策なら、現状でも学費免除など別の就学支援策がある。

給付型を検討する前に現行制度の課題解決が先だ。卒業後の返済で3カ月以上の滞納者が約17万人にのぼる。住所不明で督促できないケースが相当数ある。こうした事態を招かないよう学生を指導する大学の責任は重い。

大学の年間授業料平均は国立約54万円、私立約86万円で近年、高騰が指摘される。家計が苦しい中で奨学金に頼る学生が多いのはたしかだ。

一方で少子化にかかわらず大学が増え、大学間の教育の差は広がっている。玉石混淆（こんこう）と言ってもいい。レジャーランド化した大学にまで多くの予算を割く意味はあるのか。国がどこまで面倒をみて教育コストを負担すべきかの議論も避けてはならない。

経済状況から「格差」解消が必要というなら、小中高校段階で公教育を担う教師の指導力を高める施策を置いてはおけない。そして大学で学びたいと真に意欲を持った人材を鍛えることに国の予算を厚く使いたい。

国力につながる教育への十分な投資は必要だ。同時に限られた財源のなかで何を優先すべきか考えるときだ。

日医会長に横倉氏3選 4年ぶり投票

共同通信 2016年6月25日

任期満了に伴う日本医師会（日医、会員約16万7千人）の会長選挙が25日、東京都文京区の日本医師会館で行われ、現職の横倉義武会長（71）が、対立候補で常任理事の石井正三氏（65）を破り3選を決めた。会長の任期は2年。

横倉氏は福岡県出身。2016年度の診療報酬改定で、医師らの技術料に当たる「本体部分」が増額されたことなどが、追い風となった。横倉氏は12年の会長選で現職の原中勝征氏を

破って初当選。14年の前は無投票で再選された。

唐津ケーブルテレビジョン 制作の2番組 受賞【佐賀県】

西日本新聞 2016年06月26日

唐津ケーブルテレビジョン（唐津市東大島町）のコミュニティーチャンネル「び〜ぷる放送」制作の「浜崎祇園祭2015」が第12回ケーブルテレビ九州番組コンクールテーマ番組部門で準グランプリ、「僕らは自立する 唐津特別支援学校高等部3年生」が第53回ギャラクシー賞テレビ部門で奨励賞を受賞した。

浜崎祇園祭は人形などを豪華絢爛（けんらん）に飾り付けた高さ15メートルの山笠が練り歩く夏祭りで、夜中には光の輪を描きながら旋回させる。後世に伝統を残していく番組づくりを目指し、山笠製作から本番、山笠解体までを2カ月半にわたって取材。30分番組で、飾りづくりにこだわり、祭りに誇りを抱いている人々の姿を描いた。

「僕らは自立する」は、障害という社会的ハードルを乗り越えて24人が進路を決め、卒業するまでの1年間を追った1時間30分のドキュメンタリー。（1）一般企業に就職する生徒（2）障害者福祉事業所を利用する生徒（3）生徒を支える教職員—の視点から「障害者の自立とは何か」を見つめている。

同社は「地域の魅力の再発見や課題に向き合う番組づくりに、さらに精力的に取り組んでいきたい」としている。

産経女子特区 LGBT（1）性的少数者が標的に？ 「自分を偽らない」「ありのまま生きる」社会を…

産経新聞 2016年6月25日



性的少数者を意味する「LGBT」。同性愛や両性愛、出生時の性別に違和感を覚える性的少数者は、偏見や差別の目にさらされやすい。米フロリダ州で起きた銃乱射事件は、性的少数者を狙ったヘイトクライム（憎悪犯罪）の可能性も指摘された。どちらの性を愛するかと

いった性的指向と性自認は、個人が生まれ持った特性・特徴であり最も尊重されるべき基本的人権の一つとされる。カミングアウトしてもしなくても生きやすい社会に向け、国内の取り組みを追った。

パートナーとなった弁護士カップル

「自分から言わない限り異性愛者になりすますこともできる。だけど自分を偽ることは、自らを傷つけることでもある」

こう話すのは大阪市北区の弁護士、南和行さん（39）。南さんは同僚の弁護士、吉田昌史さん（38）と公私にわたるパートナーシップを結ぶ。

南さんが、自分が他と違うと気づいたのは小学生の頃。女の子に興味を持たず、「自分は欠陥があるのでは」と悩んだ。大学に入学し、ゲイの友人や吉田さんと知り合ったことで、ようやく自分を受け入れたという。

同性愛者やトランスジェンダーなどの性的少数者は、日本の人口の3～5%存在するとされる。しかし、差別や偏見のため自らの存在を隠したり、悩んだりする人は少なくない。性的少数者の人権に関する団体が平成22年11月～24年3月に実施した調査では、50人（22～58歳）中約半数が自殺を考えていた。

南さんは3年前、取材をきっかけに社会に向けてカミングアウトし、各地で講演する。支援の一方、心ない言葉に傷ついた。「親不孝者」「子孫の繁栄という人類最大の義務の放棄だ」「どっちが女でどっちが男役なの…」。そのたびに胸がえぐられる。

同性カップルに証明書を発行する東京都渋谷区のパートナーシップ条例が施行（昨年4月）されたことを機に、LGBTを人権問題として認識しようという機運が高まっている。

今年5月7、8の両日、東京・代々木公園で開催されたLGBTの祭典「東京レインボープライド2016」は、過去最高の盛り上がりを見せた。花嫁姿で写真撮影する同性カップルや、約4500人が行進したパレード…。異性愛者も含め両日で約7万人が参加し、4年前の約1.6倍に達した。

南さんは「理解の広がりを感じる。これまでの日本はカミングアウトさせない社会。これからはきっと変わっていく」と力を込めた。



潜むニーズ…企業も一歩踏み出して

5月末、都内のビルの一室に当事者や企業の人事担当者らが集まり、「性別適合手術を受ける場合、会社にどう伝えたらいいだろうか」「積極的に雇用するのに必要な取り組みは」—など、性的少数者のキャリア形成について活発な意見を交わした。主催したNPO法人リビット（東京都新宿区）はLGBTの若者や子供の支援と理解醸成に取り組む団体。「LGBTの子供がありのままの自分で、大人になるためには就職が大きな課題」（薬師実芳＝みか＝代表）と就労支援を行う。

性的少数者が働きやすい職場づくりを目指す企業が増えている。しかし、抱える課題が個人で異なる上に、カミングアウトする人が少なく表面化しにくい。当事者の有無やニーズが分かりにくいことが、女性や障害者への差別撤廃と比べて対策を難しくする。

このため、任意団体「ワーク ウィズ プライド」は、「性的指向、性自認による差別をしない」「当事者のあぶり出しをしない」など各企業共通の社内ルールの評価指標づくりを開始。事務局の川田篤さん（54）は「自分を理解してもらえないままでは忠誠心も芽生えにくい。オープンにしても、しなくても居心地のいい環境が理想」とする。

一方、職場での差別的な言動は「セクハラ」だが、無自覚な社員も少なくない。厚生労働省は来年1月に男女雇用機会均等法の指針を見直し、より積極的な対応を企業に促す方針だ。

薬師代表は「LGBTであることで何かを諦めることなく、自分が何をしたいのか考えて一歩を踏み出してほしい」と就活生にエールを送る。

編集後記

「カミングアウトして、より良い職場を作りたい」という人もいれば、「公表する意味がない。そっとしておいて」という人もいる。課題も理想も千差万別。それは人として当然のこと。LGBTをひとくくりせず丁寧に向き合うことは、皆が自分らしく生きられる懐の深い社会のヒント

になるはず。記事をきっかけに、当事者意識でこのテーマに向き合っていただけたら幸いだ。（松）

産経女子特区とは？

産経新聞東京本社に所属する女性記者が中心となり所属部局をこえて、さまざまなテーマを追いかけます。今回の担当・石井那納子、小島由衣、篠原那美、松田麻希、村島有紀、矢田ゆき、油原聡子 特別協力・伴龍二

LGBT（2）男装をやめて女性装をしている大学教授は…「女性の方が寛容」「見えない差別を受けているからでは？」 産経新聞 2016年6月25日

「女性装をすることで、安心感を得た」と話す東京大学東洋文化研究所の安富歩教授（本人提供／その江撮影）

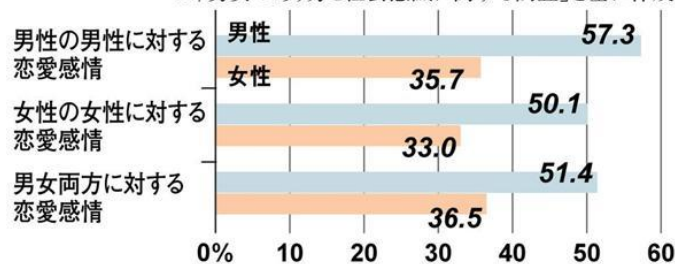


性的少数者を意味する「LGBT」。同性愛や両性愛、出生時の性別に違和感を覚える性的少数者は、偏見や差別の目にさらされやすい。米フロリダ州で起きた銃乱射事件は、性的少数者を狙ったヘイトクライム（憎悪犯罪）の可能性も指摘された。どちらの性を愛するかといった性的指向と性自認は、個人が生まれ持った特性・特徴であり最も尊重されるべき基本的人権の一つとされる。カミングアウトしてもしなくても生きやすい社会に向け、国内の取り組みを追った。

広島修道大・河口和也教授が代表を務める国の科学研究費助成事業の研究班が昨年3月に実施した意識調査では、同性同士などの恋愛感情に対し、女性のほうが男性より寛容で、否定的な感情が少ないことが分かった＝グラフ。

異性愛以外の恋愛に関する否定的回答の割合

※「男女のあり方と社会意識に関する調査」を基に作成



「私もリアルに感じます。異性装をしている私に対して、女性の方が圧倒的に親切です」。東京大学東洋文化研究所の安富歩教授（53）はそう語る。

安富教授は2年前、女性装をすることで「ただならぬ安心感」を覚え、自分自身が男だという認識が誤っていたことに気がついた「トランスジェンダー」の当事者

だ。女性がLGBTに寛容なのは「女性もまた（男性が多数を占める組織などで）マイノリティーとして日々、見えない差別を受けているからではないか」と話す。

そもそも、なぜ差別が生まれるのか。安富教授は、日本社会特有の通念が自分らしく生きることを阻んでいるせいだと語る。

「日本は立場や役割を重んじる社会。例えば会社組織では、ポジションにふさわしい振る舞いや役割を果たすことが求められ、そうしなければ『役を果たしていない』『役立たず』とされてしまう。そんな組織で、自分の意見ややりたいことを押し殺していると心が苦しくなる。そのはけ口が差別や嫌がらせとなってマイノリティーへと向かうのではないか」

少子高齢化が進み、「1億総活躍」が求められる今、こうした社会通念はある種の閉塞感を生み出しかねない。安富教授は、LGBTの生き方に目を向けることが、人々の意識を変えるきっかけになると指摘する。

「LGBTだとカミングアウトするには、『社会的に求められている立場』でいようと自ら築いた心の壁を、勇気を持って取り払う必要があります。LGBTを含め多様な価値観が認められる社会になれば、多くの人々が『自分自身』を生きられるようになる。日本の未来に必要な創造性やイノベーションも、そこから芽生えていくのではないのでしょうか」

編集後記

差別、偏見、いじめ、ハラスメント。人の心に芽生える「他者への攻撃性」は「ありのままに生きられない苦しみ」に由来すると、安富教授は話します。労働人口が減り続けるこれからの時代に必要なのは、多様な生き方を認め合い、互いの能力を引き出す、寛容な社会。「私にとって、ありのままに生きるとは？」。まずは、自分を見つめなおすことから始めませんか。（篠）

LGBT（3・完）漫画に描かれる当事者たち…その思いを迫体験し「多様性」認める文化を

産経新聞 2016年6月25日

性的少数者を意味する「LGBT」。同性愛や両性愛、出生時の性別に違和感を覚える性的少数者は、偏見や差別の目にさらされやすい。米フロリダ州で起きた銃乱射事件は、性的少数者を狙ったヘイトクライム（憎悪犯罪）の可能性も指摘された。どちらの性を愛するかといった性的指向と性自認は、個人が生まれ持った特性・特徴であり最も尊重されるべき基本的人権の一つとされる。カミングアウトしてもしなくても生きやすい社会に向け、国内の取り組みを追った。

三島由紀夫の『仮面の告白』やパトリシア・ハイスミスの『キャロル』など、優れた文学作品でも多様な性は描かれている。竹宮恵子さんの『風と木の詩（うた）』や山岸涼子さんの『日出処（ひいづるところ）の天子』など、少女漫画で同性愛を知ったという人も少なくない。

最近では恋愛を主題にせず、同性愛者の生活や悩みをリアルに描写する漫画も増えている。田亀源五郎さんの『弟の夫』は、異性愛者の男性が双子の弟の夫と暮らすうちに自分の中の偏見に気づき、成長する姿を描く。「LGBTという言葉が流行する、しないにかかわらず、そういう人は社会の中に居続ける。そのことを作品から感じ取ってほしい」と田亀さん。



田亀源五郎 『弟の夫』(双葉社)

同性婚をテーマに一般社会のなかでのゲイを描く。弥一と夏菜は父娘2人暮らし。ある日、弥一の双子の弟、涼二の夫を名乗るカナダ人男性、マイクがやってきた…



鎌谷悠希 『しまなみ誰そ彼』(小学館)

広島・尾道を舞台に性に悩む少年の青春ストーリー。主人公「たすく」はゲイであることを同級生に知られたとおびえ、自殺を図ろうとするが、謎めいた女性からある場所に誘われる…



よしながふみ 『きのう何食べた?』(講談社)

弁護士と美容師の中年男性カップルの食生活が淡々と描かれる料理漫画のヒット作

鎌谷悠希さんの『しまなみ誰(た)そ彼(がれ)』は性に揺れる高校生「たすく」が主人公。鎌谷さんは女性として生まれたが、性自認は女性でも男性でもない「X（エックス）ジェンダー」。男女のどちらも

恋愛対象とならない「アセクシャル」でもある。「物心ついた頃から性別に違和感があり、10代は常にその違和感と周囲との感覚の違いに悩んだ」。そんな鎌谷さんが、満を持して取り組む意欲作だ。

性的少数者を意味する「LGBT」。同性愛や両性愛、出生時の性別に違和感を覚える性的少数者は、偏見や差別の目にさらされやすい。米フロリダ州で起きた銃乱射事件は、性的少数者を狙ったヘイトクライム（憎悪犯罪）の可能性も指摘された。どちらの性を愛するかといった性的指向と性自認は、個人が生まれ持った特性・特徴であり最も尊重されるべき基本的人権の一つとされる。カミングアウトしてもしなくても生きやすい社会に向け、国内の取り組みを追った。

三島由紀夫の『仮面の告白』やパトリシア・ハイスミスの『キャロル』など、優れた文学作品でも多様な性は描かれている。竹宮恵子さんの『風と木の詩（うた）』や山岸涼子さ



金井景子・早稲田大教授

んの『日出処（ひいづるところ）の天子』など、少女漫画で同性愛を知ったという人も少なくない。

最近では恋愛を主題にせず、同性愛者の生活や悩みをリアルに描写する漫画も増えている。田亀源五郎さんの『弟の夫』は、異性愛者の男性が双子の弟の夫と暮らすうちに自分の中の偏見に気づき、成長する姿を描く。「LGBTという言葉が流行する、しないにかかわらず、そういう人は社会の中に居続ける。そのことを作品から感じ取ってほしい」と田亀さん。

鎌谷悠希さんの『しまなみ誰（た）そ彼（がれ）』は性に揺れる高校生「たすく」が主人公。鎌谷さんは女性として生まれたが、性自認は女性でも男性でもない「X（エックス）ジェンダー」。男女のどちらも恋愛対象とならない「アセクシャル」でもある。「物心ついた頃から性別に違和感があり、10代は常にその違和感と周囲との感覚の違いに悩んだ」。そんな鎌谷さんが、満を持して取り組む意欲作だ。

相次ぐ介護疲れによる高齢家族殺害 「孤立化」が悲劇招く

産経新聞 2016年6月25日

長年の介護疲れから、高齢の家族を殺害する事件が後を絶たない。終わりが見えないことから「ゴールのないマラソン」「生き地獄」とも表現される過酷な介護生活。専門家は「独りで抱え込まず周囲や行政に相談を」と訴える。

「介護が終わるのは、その人が亡くなる時。子育てのような達成感も明るい未来もない中で、24時間心身ともに休まらずに消耗し続ける生き地獄のような介護生活が続くと、そのむなしさと悲しさから鬱状態となるケースが少なくない」

NPO法人「心の健康相談室」（東京）代表で、心理カウンセラーの和田由里子さんは指摘する。自身も認知症の母親を介護した経験がある和田さんは『『長く生きて』という気持ちと、『早く死んで』という矛盾した気持ちの葛藤に悩まされた』と振り返る。

警察庁によると、「介護・看病疲れ」が動機の殺人事件（未遂を含む）は統計を取り始めた平成19年の30件から年々増加。22年の57件をピークに、その後も40～50件台で推移している。

介護問題に詳しい淑徳大の結城康博教授（社会福祉学）によると、介護殺人の加害者に共通する点は、（1）責任感が強く熱心に介護してきた人（2）仕事と思って手を抜くことができない男性が多い（3）親戚（しんせき）や介護サービスなどの支援を受けず孤立化した人—だという。

昨年12月、栃木県で11年以上介護した寝たきりの妻＝当時（69）＝を絞殺したとして今年5月に懲役3年6月の実刑判決を受けた70代の夫の裁判では、検察側が「ケアマネジャーに相談し、ショートステイや施設の利用を検討すべきだった。独り善がりの考えでストレスを抱え込んだ」と指摘。夫も「ケアマネジャーの人にもっと話しておけばよかった」と後悔した。

和田さんは「介護は独りで抱え込まず、各自治体にある地域包括支援センターなどに相談し、介護体制を整えることが重要」と強調する。結城教授は「介護サービスを受けたり、施設に預けたりすることは、恥ずかしいことではなく、当然のことという啓発をして社会全体に浸透させる必要がある」と指摘している。

認知症の常識が変わる本特集

日刊ゲンダイ 2016年6月26日

世界一の長寿国である日本では、高齢者の3人に1人が認知症という時代が訪れようとしている。高齢化と認知症の増加は対になるもの。どうせ長生きするのだから、認知症を恐れるだけでなく、前向きに捉える発想の転換が必要だ。今回は、認知症とともに前向きに生きる患者のメッセージをはじめ、意外と多い認知症の誤診など、認知症の常識を変え

る4冊を紹介しよう。

「認知症と診断され、これからどうやって生活をしたらよいか、わからなくなった人のために、私の経験をもとに書いたものです」

こんなメッセージとともに始まる、佐藤雅彦著「認知症の私からあなたへ」(大月書店 1200円+税)には、2005年にアルツハイマー型認知症と診断された著者が、この10年間どのように生き、何を感じてきたかが素直な言葉で語られている。

システムエンジニアとして活躍していた著者が認知症を発症したのは51歳のとき。「私の人生は終わった」と、絶望の底に突き落とされたという。しかし、認知症には二重の偏見があることに気づき始める。ひとつは、社会が「認知症になると何もできなくなり、何も分からなくなる」と思い込んでいること。そして、もうひとつは自分自身がそれを信じ切っていたことだった。



「認知症の私からあなたへ」佐藤雅彦著

著者も認知症と診断されてすぐに、25年間勤めた会社を自ら辞めている。失敗ばかりするのではないかという恐怖で身がすくみ、無気力にも陥った。症状以前に、認知症に付けられたイメージや誤解が、生きる力を奪っていたのだ。

そのことに気づいてからは、生活が少しずつ変化する。最初のうちはもの忘れ対策として行動の記録を付けていたが、どうしても“できないこと”ばかりに意識が向いてしまう。そこで、その日に“できたこと”や“楽しかったこと”だけをつづるようになった。すると、自然と自信が湧き、できることが意外と多いことも分かり、生活にハリが生まれた。

もちろん、忘れることもある。そこで、携帯電話やタブレット端末を駆使し、オンラインのカレンダーでスケジュールを管理したり、アラーム機能で約束の時間を知らせたり、出会った人や食べたものを写真にとって残すようにした。

数年前からはフェイスブックも始めている。認知症にとって記憶障害は避けられないが、便利な機械の助けを借りれば解決は可能だ。

著者は、「私にとってIT機器は外付けの記憶装置」と語る。ちなみに、携帯電話やタブレット端末の操作は、認知症になってから覚えたそうだ。

認知症になった自分だからこそできることを探し、これまでの体験を伝えるための講演活動も精力的に行っている。しかし、この10年間、知恵と工夫で“普通に”暮らし続けてきた著者に対し、「本当に認知症?」「売名行為だ」という心ない声もあるという。これこそが認知症に対する偏見の表れだ。

認知症の先にあるのは決して絶望ではなく、人生を諦める必要などない。患者本人の言葉から、そのことに気づかされる。

「治さなくてよい認知症」上田諭著

認知症を治したいと願うのは無理からぬこと。メディアも専門医も社会全体もそうあおるため、当事者の思いも募るばかりだ。しかし、現時点では認知症を治す薬はない。そのため、患者とその家族は「認知症を治そう」「元に戻そう」という思いは捨てるべきだと、高齢者専門外来の医師である著者は言う。



認知症になったら人生を諦める、ということではない。むしろ逆で、認知症と付き合いながら前向きに生きるための、発想の転換だ。長寿社会には認知症が付きもの。そのことを受け入れ、治すことではなく、長生きをしながら認知症と共存することに力を注ぐべきだと本書。



新しい出会いや体験を通じて生活に張り合いを持たせ、豊かな認知症ライフを送るための工夫も模索していく。(日本評論社 1600円+税)

「その症状、本当に認知症ですか？」神谷達司著

年間3583人。これは、NHKが日本認知症学会などに行った調査で明らかになった、“認知症と誤診された患者の数”だ。

なぜこれほどまでに多いのか。原因のひとつが、認知症専門医の育成が追い付いていないこと。そしてもうひとつには、認知症とよく似た症状が起る疾患が非常に多いことが挙げられる。例えば、頭蓋骨内の出血で脳が圧迫される慢性硬膜下血腫。MRIやCT検査で容易に分かるはずだが、カウンセリングのみで診断を下すクリニックで

は誤診が起りやすい。

また、甲状腺機能低下症でも認知症とよく似た物忘れが起きやすく、誤診を招きやすい。

高齢化の加速で認知症患者が増加するのは間違いない。しかし、誤診が多いという事実も知っておいた方がよさそうだ。(扶桑社 780円+税)

「認知症は早期発見で予防できる」青柳由則著

認知症を根本的に完治させる治療法はまだないが、早期発見で患者数を半分に減らせることが分かってきた。その鍵を握るのが、MCI（軽度認知障害）の段階で対処することだ。

MCIの判定は非常に難しく、アルツハイマー病では脳へのアミロイドβタンパク質の蓄積が特徴だが、MCIでは6割の人にしかこれが起らない。一方で、MCIの患者に表れやすい変化が明らかになってきた。それは、外出するのが面倒になる、小銭での支払いが面倒でお札で支払うことが多くなる、料理の味付けが変わる、外出時の服装に無頓着になる、同年代の人と比べて歩く速度が遅くなることなどだ。

物忘れの症状が軽くても、これらの変化が目立つ場合はMCIの可能性が大きいいため、専門医の受診を急ぎたい。(文藝春秋 1400円+税)



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行